

資料

伊藤律との架空會見記

和田洋一

伊藤律との架空會見記を、朝日が大スクープとして掲載し、恥を天下にさらしたことは、われわれの記憶からも容易に消えないであろう。あの事件後一週間たったころ、朝日の一記者は私に「全社ゆううつです」と語つたが、朝日の記者はもちろん、他社の者でも新聞人としての自覺をもつてゐる限り、今度の事件に關連して多少とも肩身のせまい思いをしたことと思う。

ただ今度の事は非常に重大であるにもかかわらず、新聞社内の出来事であるために、世間一般には最少限度の事しか知らされなかつた。朝日は自社の不面目をすんで吹聴する筈はないし、他社は同業のよしみ?で多言をひかえた。一例をあげるならば、あのような破れんちを敢てした長岡宏という記者の個人的なことは何等公表されなかつた。當人は彦根高商昭和十六年の出身であるが、そのことほどの新聞紙にも出なかつた。これは彦根高商のために仕合せであつただろう。長岡氏の寫真も出なかつたし、長岡氏の夫人ないし家庭についても一言も書

かれてなかつた。これは新聞記者の復得の一環であるだろうが、われわれとしては長岡氏一個の私的生活はどうでもいいとして、あの事件全體について今すこし知つておく必要がありはないのか。月刊雑誌の中には或いはこの問題を取上げるものもあるだろうが、大朝日にたいする遠慮もあるだろうし、それがどの程度になされるかは疑問である。それで私として筆をとることにしたのだが、もとよりこの事件について徹底的に調査したわけではなく、事件の全ぼうを傳えるなどといふ意図は始めから毛頭ない。ただこの事件のがいりやくをたどりながら、一應問題となるものを拾いあげてゆこう。批判は讀者にまかせるとして、材料だけを出してみよう。筆者の積極的な判断は差しひかえるとして、事實の上に立つた或る程度の推理は許しても、ひらりことにしよう。とにかく小さな一つの記録として、これを書きとどめておこう。朝日新聞の記者諸氏は私よりもと委しく知つてゐるだろうが、決してこの事件については書かないだろう、そり思つて筆をとつた次第である。

伊藤律氏神戸へ現る 薬アメ行商人に變装 といふ四段見出しの記事が夕刊朝日の二面トップに出たのは九月廿二日であった。伊藤律は十九日の午後八時神戸市内某氏の家を訪ね、夕食をとつた後三十分にして去つたことを神戸市警刑事課がかぎつけた。伊藤律はヨレヨレの軍隊服に黒眼鏡をかけ、ひげはぼりぼりだつたといふ記事で、これが實は長岡記者がいい加減に

作りあげた記事だったのである。併しこれだけですめばまだよかつたのだが、この裏づけをするために數日後に寶塚山中の架空會見記が更にでつち上げられることになつて、事態は取りかえしのつかないものとなつてしまつた。

長岡はたいへされてから、水産廳かんけいの汚職事件をよそ的新聞に抜かれたので自分もじつとしておれなくなり、競争心から伊藤律神戸へ現るの記事を製造したのだと告白している。この記事が始め鶴支局長に呈出された時、鶴氏は從來この種情報がデマに終始しているため眞偽の點を入念に確かめたが、長

岡記者は

「この記事は來阪した伊藤律に三萬圓の資金を渡したといら基氏に直接聞いたことだから絶対大丈夫であり、某氏は自分の中學時代二級下の舊友で黨關係の山村といらんです」

と答へ、支局長は結局だまされてしまつた。記事が朝日に二

面のトップ記事となつて出た時、他社の記者があわてさせられたことは想像にかたくないが、同時に、長岡記者が方々で色々と質問を受け、裏づけを要求され、伊藤律とどこかで會見出来なかつたことも又想像にかたくない。

毎日の神戸支局は、朝日とのこの記事は何等根きよがないこと、警察は伊藤律の搜查は何もしていらないことを直ちに突きとめ得て、翌々日、廿四日に「伊藤氏來神せず」との記事を公表した。このままですめば、朝日が毎日にやつけられたといりこ

となる。ここにおいて長岡記者は、小さくなつておとなしく引込むか、伊藤律來神の記事を裏付ける出たらめ記事を更に作

製するか、その何れかを選ばねばならないことになつた。長岡氏は後者を選んだ。毎日新聞に否定の記事が出た翌廿五日の朝

「決意」がかためられたこと、同日午後二時長岡氏が神戸支局次長田中氏と同道で神戸市警の坂本警備課長を訪ね、伊藤律と會見することになつてゐる旨を告げ、身邊のごえい打合せについて話し合つたことなどは、伊藤律氏會見記取消しの社告の出た翌日の朝日の三前に報道されている。

その晩おそく長岡記者は自動車で單身寶塚へ出かけ、午前一時五十分宝塚旅館に入り、直ちに神戸支局へ連絡の電話をかけた。この一時五十分といふ時刻は、長岡氏自身の創作した會見記では、案内役の其黨員と自動車をおり、山に向つて歩き始めた時間であり、會見記の時間と電話の時間とを結び合せば、これは變だということに気がつくはずだが、その晩神戸支局には支局長の鶴氏、次長の田中氏の何れもとまつていなかつた。こんな大スクープを前にして香氣すぎるではないか、新聞記者の常識として有り得ないことだと、あとから首をかしげている人も朝日の社内にあつたが、ともかく長岡氏は支局の誰かと二分足らず連絡して電話を切つた。十月一日の朝日によれば、長岡氏はそれから旅館の一室で原稿の骨組を書き、同午前五時半ごろ電車で神戸支局に歸り、直ちに創作會見記を完成、同十時頃添稿した、ということになつてゐる。

所で、ここで誰もが先ず考えるのは、神戸支局長はこの原稿のインチキ性を見破ることが出来なかつたのだろうか、という點である。朝日の某記者が私に語つた所によれば、長岡氏は數ヶ月前にも架空の記事を一度ねつぞうしてばれたことのある前科者だとのことであり、九月卅日の新大阪の「なぜ書かれた? ウソの會見記」と題する記事も、長岡氏が神戸の市警記者クラブの仲間にハッタリをきかせ、あまり信用がなかつたことを傳えており、そうした人物にたいして支局長は警戒心が足りなすぎたのではないかといひ推測をひき起す。

所が支局長の鶴秀茂氏は八月に本社から神戸へ轉任したばかりで、そのため長岡といひ人物を十分つかんでいなかつたことは確かで、大阪新聞の神戸支局長もその點同情的な見解を私にもらしていた。(長岡氏の性格については朝日の編集局次長は小心で眞面目と述べ、大阪新聞の支局長は、落ちつきのない男だが新聞記者としてのファイトはあつたと話している。しかし一方、鶴氏は昭和五年朝日に入社直後社會部の記者をほんの一寸つとめたことはあるが、それ以後約二十年間ただの一度も編集

原稿はもちろん東京本社にも西部本社にも中部支社にも流れ、ただちに掲載された。その後、讀者を驚かせ捜査當局にしようげきをあたえたこの記事にかんする問い合わせにたいして、東京本社進藤社會部長は次のように答えている。

「實はこういう大物が突然神戸からとびこんできたので僕自身呆氣にとられてゐるくらいだ。長岡記者は伊藤律氏の神戸潜入をキャッチし、それ以來熱心にフォロウしていたもので、このスクープは結局同君の努力の集積の結果だろう。それに同君が情報を持つてくる人に信用されたということがこの記事になつて現れたものと思ひ」(九月廿八日の新聞協會報)

鶴支局長としては、伊藤律との會見記が神戸支局の大きな手柄になるといひ意識はもちろん一方にあつただらうし、他方

原稿にたいする半信半疑の氣持は最後まで残つていたであろう。ともかくも原稿は第一關門を通過して大阪本社の通信部長の手許へとどけられた。通信部長は各支局から本社へ送られる原稿にかんしての責任者である。丁度その時編集局内の部長會議が行なわれていて、この會見記を夕刊にのせることについて可否が問われた。この時の會議では、どうもこの會見記は、ふに落ちない點があるから、もうすこし調査を要する、夕刊けいさいは見合せるよりにといひ意見も可成り出たと言われていた。編集局内の重要な地位にありながら處罰を受けなかつた人は、けいさい反対の意見を表明した人だらうといひ臆測もそこから出てくるわけだが、結論としてはやはり夕刊にけいさいすることになつた。

おかして會見するというよりなことが一體あり得るであろうか。鶴山政道氏は「讀者は直感的にどうして伊藤律が新聞記者に會つたか疑つた、この點が分らぬ限りあの記事は根本的にじつまがあわず、單なる興味以上の價値をもたない、なぜ伊藤が會つたのかといふのを追及しただろ

か、もしこの點疑いをもたずにただ會見記事に目をくらませたのだとしたなら、この心理は新聞人の職業的欠陥である」と述べており、元毎日記者今枝四郎氏は「何のために伊藤ほどの人物が長岡記者に夜中山林の中で會うことにしたか、この點でネッ造とかんづいた。それが朝日幹部の頭に来るべきが常識である」(十月九日の新聞協會報)と述べている。

この問題は別にして長岡氏の原稿そのものにも疑わしい點があり、神戸支局長、或いは本社の人たちの眼のくもりを思われる節はたしかにある。これももちろん後になつてからの指摘であるが、新大阪が述べているように、長岡氏はタオルで目隠しをされたと書きながら、自分のめがねについて何も書いてないという點、ボケットから伊藤律の寫真を出して見くらべたといひるのであるが、いくら日夜でも寫眞など一寸見て分る筈はなく、そのへんの描寫が非常に不足であること、それから先に述べた電話の時間の問題など。もつとも東京や西部本社では電話の通話の事など知らなかつたであろうし、長岡記者がめがねをかけていることも知らなかつたであろうし、何と言つても神戸支局長の責任がやはり一番重大となる。大阪本社編集局次長の

松尾氏は、神戸支局長ならびに本社の立場にかんして次のようない説明をしている。

「……出稿にさいしては鶴支局長も十分に長岡記者に確かめ、さらに送稿を受けた本社でも不審な點は色々問合せ疑念をはらした後に出したものであつた。……鶴支局長としても新聞記者として信頼する部下の原稿を頭から疑い、警察が犯人を調べるよう調べるわけにはいかない、またそのことは本社對神戸支局の場合にも言えることだが、何れにしてもこのような結果になつて申譯ない次第だ」(十月二日の新聞協會報)

十月五日の朝日は再び社告を出し、「ネッ造記事の筆者長岡宏に退社を命じましたが、かかる記事が幾多の闇門を通過して紙面に掲載されるに至つたのは編集の關係各部門においてつくすべきをつくさずその職責に欠くる所があつたためであります」として、神戸支局長の依頼退社、大阪本社編輯局長ならびに神戸支局次長の解任のはか、大阪、東京、名古屋、福岡の主腦部九名にたいする譴責戒告の處置を發表した。編輯の直接責任者が處置されただけで重役が責任をとらなかつたことはやはり一つの問題を残したといふべきであろう。もつとも一方では責任追及は神戸支局長、次長をもつてとまるべきだといひ意見も私は一二の人からきいた。

伊藤律との架空會見記

毎日は、朝日が御詫びの社告を出した前日の夕刊に「長岡朝日記者に逮捕狀」という二段見出しの記事をかかげ、翌月卅

日の朝刊は三段見出しで更に一そら委しい報道をのせた。長岡記者は宿屋で午前二時から五時半までを過しながら、自分の作

った記事の中には三時半に伊藤律と會つたと書いているが、追及された場合のことを考へ、翌々日宿屋へ出かけて宿帳の訂正（四時半から五時半まで）をしたという事實もその中でばくろされていた。そしてその日の夕刊「近事片々」のらんには、「架空會見記はジイドのが本ものかと思つていたが、さては本ものはこちらであつたか」というようなやゆい調子であらわされた。更に翌十月一日の朝刊にはこの事件を取扱つた「新聞の信用」と題する社説が出た。もつともこの社説は「朝日が正々堂々と取消した今回の措置は立派である。この態度によつて、朝日の信用は傷つけられないで済むだろう」といつた風で、手書きらしい所は全然なかつた。全體的に毎日として御手柔らかな態度であつたが、そりした態度は果して紳士的だとして賞讃さるべきものかどうか。長岡氏の同類は毎日の記者の中にもいそうな氣がして、そのために毎日として商賣がたきの失敗を攻撃する氣持になれなかつたのかどうか。毎日をこの七月末追放された共産黨の人たちが出しているガリ版の新聞は、毎日の編輯局の最高幹部にかんするスキヤンダルを、朝日がのせなかつたのだ、その御かえしに毎日が今度はどぎつく書くことを遠慮し

程はもちろん筆者には分らない。

九月卅日の新大阪の記事「何故書かれた？ ウソの會見記」は、執筆者が社内で特ダネ賞をもらつたそうであるが、これがともかくも大朝日にたいして遠慮せず（といつて何も惡意にみられたものでは無論なかつたが）に積極的に、そして或程度つづられたこの事件を取上げた唯一のものであつた。そして最後に、長岡記者だけではなくに、朝日そのものの責任が法的に追及されるのではないかとも書かれていた。

大阪日々の「日々の怨」らんでは最初、寶塚山中に現れた伊藤律は影武者ではないかと一部に疑惑がはさまれている、と述べ、次には、名月下の劇的な會見記は、三ヶ月かかるまでもよう捕えないでいる全國十餘萬のけいさつの捕方讀むべからずのくすぐつたい場面だ、と書き、ウソがばれたあとは「同業朝日」の架空會見記は氣の毒な位のミスでした。もつとも小さい過失はわれわれも絶対にないとは保障されませんが」と日曜論草らんの中で述べている。

神港新聞は九月卅日には、長岡記者を早くも元朝日記者扱いにして、十月一日には、朝日が堂々と取消したのは立派であつたと毎日新聞に同調した。京都の三紙はこの事件には何れも、反應の反應を示さなかつた。

讀賣は十月一日の朝刊に、朝日の事件には一言もふれないで、實は伊藤律を讀賣記者に會わせようという提案が東京都在住の某共産黨員から去る九月十日にあつたという記事をのせ

た。タイトルは「共産黨情報の樂屋裏」サブタイトルは「狙う宣傳効果」。徳田、野坂を始めとして地下にもぐつた連中をつかまえ得ない日本の警察の無能を世間に印象づけるという効果を狙つて、共産黨はそのような提案をしてきたのだ。共産黨員の中には金が欲しいばかりに特ダネを提供して代價を得ようとする者もいるといふような書きぶりであつた。

朝日が「われわれの反省」と題する社説をかかげ、その他の多くの新聞がネット造られた會見記についてそれを記事を掲載した昭和廿五年十月一日が、第三回新聞週間のスタートする日であつたことが、日本のジャーナリストを深刻に反省させる機縁となつたとしたら、新聞週間の意義も中々深かつたと言わねばならないが、果して實際はどうであつただろりか。